

月尾嘉男

クルーズのゆたか倶楽部

月刊誌『ボン・ボヤージ』連載（二〇一〇～二〇一四）より
総集編版

『航海物語 — 書を捨てよ！海に出よう！』

（遊行社二〇一五）

- 第一章 海洋大国・日本
- 第二章 歴史を創造した航海
- 第三章 歴史を開拓した航海
- 第四章 貨物輸送の主役である海運
- 第五章 航海を支援する技術
- 第六章 海図の話
- 第七章 通信の話
- 第八章 港の話
- 第九章 運河の話
- 第十章 名船の話

での分量制約による未掲載部分を、あらたに第十一章として追加させていただきました。

（文章はオリジナルのままですが、図の取捨選択や青文字表示などは、編集者であるWE管理人の方で手を入れさせていただきました。）

第十一章 海戦の話

十一・一 レバントの海戦（一五七二）

肉食動物は自分や子供の生存のために殺戮をするが、それは食糧を獲得するためであり、仲間同士の殺戮は例外である。ハチやアリなどは餌場を争奪するために集団で戦闘することがあるし、シカやイヌなどもメスを争奪するためにオス同士が喧嘩し、どちらかが死亡するほどの深手になることもあるが、一時の戦闘である。ところが、資源や領土を争奪するために、相手が全滅するほどの規模で広範かつ長期に戦闘する動物は残念ながら人間だけである。

その戦闘の空間は陸上だけの場合もあるし、海上だけの場合もあるし、陸海を一体とした空間が戦場となる場合もある。したがって、豪華な客船から見渡す風光明媚な海域が、何千年前とか何百年前には、世界の歴史の方向を決定した重要な海戦の現場であったという場所も数多く存在する。そこで今回から数回、客船の航路となるような海上で、かつては巨大な軍勢同士が国家や民族の命運をかけた海戦を展開したという空間を紹介していきたい。

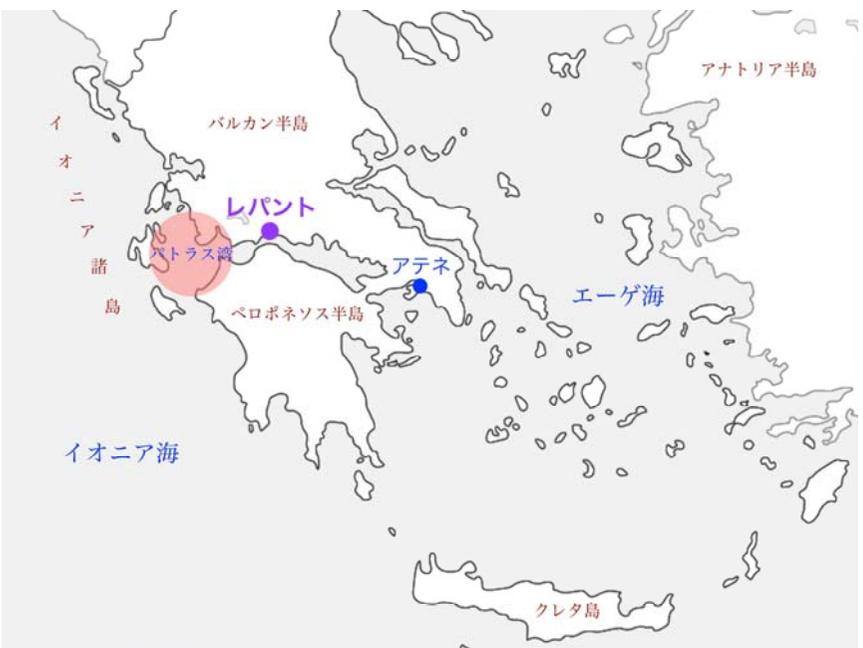
連合艦隊と帝国艦隊の対峙

第一次十字軍が一世紀の最後に聖地エルサレムの奪回に成功してから約一八〇年後、第九次十字軍が失敗のうちに撤退するのと交替するように、アナトリア半島の北部に登場した遊牧民部族長であるオスマン一世が建国したオスマン帝国が登場した。この帝国はコングスタンティノープルを中心に急速に版図を拡大し、一六世紀中頃にはアフリカ北部から紅海の両岸、メソポタミア平原から黒海北部、そしてバルカン半島をも支配する巨大帝国に成長した。

東地中海を包囲するような領土によって海上を支配するようになったオスマン帝国は、さらにベネチアの支配する島々にまで侵攻するようになり、両者の衝突は回避できない事態に到達した。ベネチア海軍は強大ではあったが、単独では対抗困難とローマ教皇ピウス五世に支援を依頼し、教皇の掛声により、スペイン王国を筆頭に、ジェノヴァやナポリなどが参加し、カソリック大連合軍が結成され、一五七一年秋にオスマン帝国と対決することになった。

諸説があるが、カソリック連合艦隊は軍艦二八五隻、兵員約八万四〇〇〇人で、シチリアのメッシーナに集結し、九月中旬以降、順次バルカン半島西側の戦場へ移動を開始した。オスマン帝国海軍は軍艦三〇〇隻、兵員約八万八〇〇〇人で、九月下旬、バルカン半島の南側の港湾都市レバントに集結し体制を整備した。そして一五七一年一〇月七日、レバントの南側の**パトラス湾**の東側にオスマン帝国艦隊、西側にカソリック連合艦隊という状態で対峙した。

このパトラス湾口付近は客船で通過した経験のある読者も多数おられる場所である。エジプトの地中海側の港湾都市アレキサン



ドリアからクロアチアにある世界文化遺産に登録された歴史都市ドゥブロヴニクへの航海の途中や、アテネの外港ピレウスからベネチアを目指してイオニア海域からアドリア海域を北上する途中に、イオニア諸島を右手にしながら航海するが、約四四〇年前、その島々の裏側で、東地中海の派遣争奪を目指した激戦が展開したのである。

史上有数の海戦の開始

カソリック連合艦隊の総司令官はスペイン国王の庶弟ドン・ホアン・デ・アウストリア、オスマン帝国艦隊の総司令官はアリ・パシヤであり、両軍は南北一列の陣形で、それぞれ三群に集合し、東西に対面した。両軍は艦隊や数量ではほぼ対等であったが、両者には重大な差異があった。連合艦隊の砲門は一八〇〇であったが、帝国艦隊は約七五〇でしかなく、二倍以上の格差があったうえに、ベネチア艦隊には六隻の最新鋭艦が用意されていたのである。

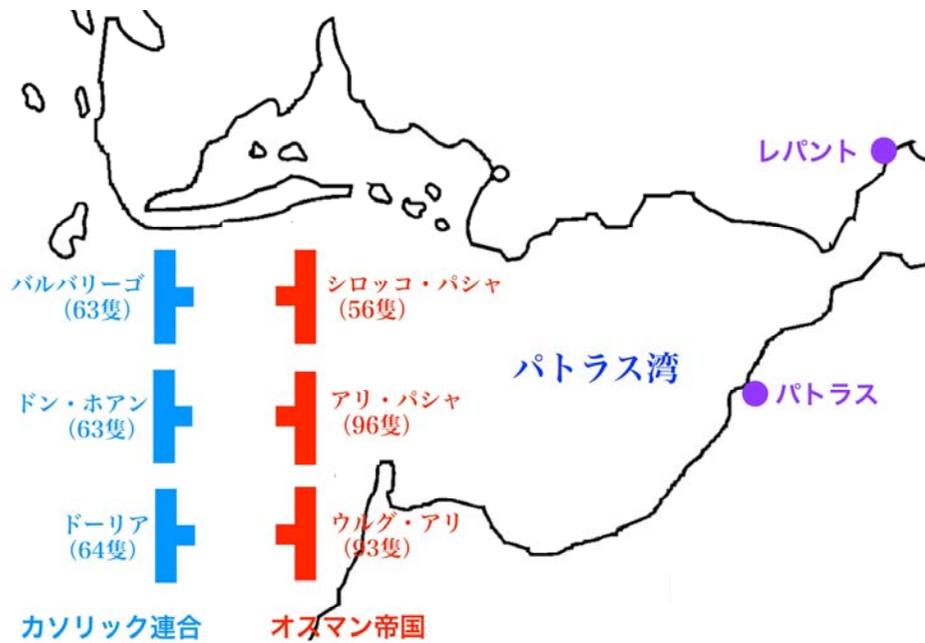
当時の海戦の主力は漕手のオールで進行するガレー戦艦が主力であり、敵艦に船首から衝突して兵士が移乗して船上で戦闘をする方法が中心であった。ところがベネチアの最新鋭艦ガレアス戦艦は喫水がガレー戦艦よりも上部にあり、甲板に大砲を設置していた。午前一時頃から開始された戦闘は、従来のように接近して戦闘するより以前に、ガレアス戦艦の遠方からの砲撃によって開始され、意表をつかれた帝国艦隊には相当の損害になった。

戦闘は連合艦隊の左翼と帝国艦隊の右翼の激突で開始されたが、その指揮をとる連合艦隊のアゴステイーニ・バルバリゴが弓矢で右目を射抜かれて重傷となり、一方、帝国艦隊の右翼を指揮するシロッコ・パシヤも戦死し、冒頭から壮絶な激戦となった。中央艦隊も両軍の旗艦が正面衝突するという激戦となったが、総司令官アリ・パシヤが連合艦隊の旗艦に移乗しようとした瞬間に鉄砲の弾丸が命中し、敵艦の甲板に転落し、斬首されるといふ失態となった。

帝国海軍の大敗で終結

右翼と中央の司令が戦死する混戦となったが、帝国艦隊の左翼の司令ウルグ・アリは、ジャンアンドレア・ドーリアの指揮する連合艦隊の右翼と対決しようとする。ところが、包囲される事態を回避しようとする右翼が方向転換したため、目標を中央に変更する。それを妨害しようと右翼の一部のジョヴァンニ・デイ・カルドーナのガレー船団が対応するが、多勢に無勢で、このカルドーナ指揮のガレー船団は二隻が撃沈され、それ以外は拿捕されるといふ事態になる。

孤立しながらもウルグ・アリ艦隊は奮戦するが、全体の右翼と中央が壊滅した帝国艦隊に勝目はないうえ、総司令官アリ・パシヤの首級が連合艦隊旗艦のマストの先端に掲示されて士気を喪失し、最後は戦線から脱出し、戦闘は夕刻に終結する。結果、帝国艦隊は兵士が約三万人死亡か行方不明、戦艦一一三隻が撃沈、一一七隻が拿捕され



たのに対比し、連合艦隊は死亡もしくは行方不明の兵士約一万五〇〇〇人、撃沈された戦艦一二隻という圧勝で終結した。

圧勝したカソリック連合国側ではあったが、勝利以後は内部での対立が発生し、オスマン帝国を崩壊させるまでには到達せず、オスマン帝国は一九二〇年代まで存続する。その一方、連合国側の中心であったベネチアは一八世紀の末期に南下してきたナポレオンの圧力により国家として消滅するという皮肉な運命になる。イオニア海域からアドリア海域に展開する絶景の背後にある世界の歴史を想像することも、船旅の興趣を増加させるものである。

十一・二 アルマダの海戦（一五八八）

出現した巨大海洋国家

一四九二年のコロンブスによるアメリカ大陸の発見を契機とし、航海術先進国スペインとポルトガルによる海外での領土紛争が活発になった。そこで両国は、一四九四年、世界を東西に二分して支配するトルデシリヤス条約を締結する。ところが一五二二年にマゼラン艦隊の生存部隊が世界一周航海から帰還すると、球体の地球を一本の縦線で二分しても領土を確定できないことが明確になり、もう一本を追加したサラゴサ条約が一五二九年に締結された。

現在の視点からは勝手放題の条約であるが、逸早く海洋に進出した両国の実力を象徴する歴史的出来事である。しかし一六世紀後半から、ポルトガルの国力が次第に低下し、一五八〇年にスペイン国王フェリペ二世がポルトガル国王を兼務し、スペインはポルトガルを支配するようになる。そのような時期に発生したのが前回紹介したレパントの海戦で、オスマン帝国艦隊に完勝したカソリック連合艦隊の中心であったスペインは世界を支配する巨大国家になった。

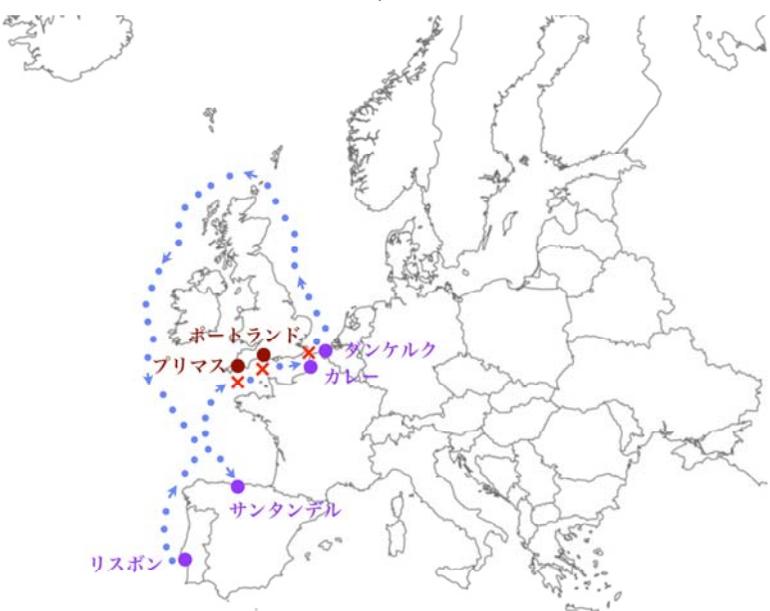
スペインとイングランドの対決

フェリペ二世は世界に展開する広大な版図と、そこに生活する雑多な民族の統治をカソリック教義の布教によって推進しようとしたが、それに反抗したのが、一六世紀以来の宗教改革によって登場したプロテスタント勢力の一角であるネーデルラントであった。ネーデルラントはスペインに反抗して反乱するものの、一五八四年に鎮圧されるが、そのときネーデルラントを支援したのが、やはりプロテスタント勢力であるイングランドであった。

イングランド女王エリザベス一世はフェリペ二世の義妹にあたり、本来、両国は友好関係にあるはずであるが、エリザベス一世から海賊行為を了承する免許を付与された海賊船舶（プライヴァティア）がスペインの貿易船舶を襲撃する事件が頻発していた。プロテスタント勢力に加担することと、海賊行為を放任するという二種の要因が重複し、一五八五年以後、スペインとイングランドの関係は緊迫し、いずれ衝突することは回避できない状況になっていた。

そのような背景から、一五八三年、レパントの海戦の英雄サンタ・クルスの計画により、フェリペ二世は強力な海軍の準備を開始する。当初の計画はレパントの海戦の艦隊の七倍の予算にもなり、途中で規模は縮小されたが、それでも艦隊は一五八三年にアゾレス諸島での海戦でフランス艦隊を壊滅させた。その戦果はヨーロッパ諸国を震撼させ、それらの国々からスペイン艦隊は通称**アルマダ**・インヴェンチブレ、すなわち無敵艦隊と命名されるようになる。

戦闘開始は一五八八年からであるが、その前年に海賊船舶の船長であるフランシス・ドレークが指揮するイングランド艦隊は、イベリア半島南部のカディスの港湾を襲撃し、二〇数隻のスペイン戦艦を破壊し、さらにポルトガル沿岸も襲撃し、十分に乾燥された大量の樽材を焼却した。この一見関係のないような行為は、スぺ



イン艦隊の真水や食糧の船内での貯蔵能力に影響し、翌年から開始される戦闘で、スペインが苦勞する原因となっている。

連戦連敗の無敵艦隊

いよいよイングランドに遠征する無敵艦隊が行動を開始しようとしていた矢先の一五八年二月九日、スペイン海軍の始祖ともされる総司令官サンタ・クルスが急逝し、海戦の経験のない名門の貴族メディナ・シドニアが後任に任命されるという事件が発生する。しかし、この不慣れな総司令官が指揮する無敵艦隊は一三〇隻の戦艦と水夫八〇〇〇、兵士一万八〇〇〇という陣容で、一五八八年の五月九日、イングランドを目指してリスボンの港湾を出航する。

一方、迎撃するイングランド艦隊は、総司令官チャールズ・ハワード、副司令官フランシス・ドレークで一七一隻の戦艦からなる艦隊である。隻数で劣勢なスペイン艦隊は、ネーデルラントを制圧して大西洋岸のダンケルクで待機しているスペイン陸上部隊と合流し、そこから対岸のイングランドに兵員を輸送してロンドンを攻撃するという戦略であった。しかし、イギリス海峡の入口の**プリマス**の沖合で敵艦に見えられ、最初の戦闘に突入することになる。

スペイン艦隊は三日月型の陣形を形成したが、イングランド艦隊は夜陰にまぎれてスペイン艦隊の背後に位置した。夜明けになり、背後に敵艦が位置していることに気付いたスペイン艦隊が方向転換を開始するが、左翼からドレーク艦隊、右翼からハワード艦隊が攻撃し、戦闘が開始された。スペイン艦隊は重量のある砲弾を使用するカノン大砲を中心とし、イングランド艦隊は軽量の砲弾を遠方まで発射できるカルバリン大砲を中心としていた。

この大砲の差異が結果を左右した。イングランド艦隊はカノン大砲の射程の外側からカルバリン大砲を発射し、敵艦に接舷して戦闘する。スペイン得意の戦術を阻止した。カルバリン砲弾は敵艦を沈没させる威力はないが、何隻かを戦闘不能にする戦果をあげ、満足した総司令官ハワードは戦闘を中止した。九死に一生のスペイン艦隊は陸上部隊が待機しているダンケルクを目指すが、荒天のため到達できず、翌日、**ポートルランド**沖合で再戦する羽目になる。

スペイン艦隊は円形の密集陣形に対戦するが、巧妙な操船技術とカルバリン砲弾の威力により、今回もイングランド艦隊の勝利となり、スペイン艦隊は陸上部隊との合流を目指して**カレー**の沖合に逃走する。しかし港湾封鎖のため陸上部隊が合流できず、一週間後、再度、イングランド艦隊と対戦を余儀なくさ



れる。二ヶ月間も接岸できなかつた戦艦は薪水も弾薬も涸渇して劣勢となり、スコットランド沖合を回遊して逃走し、出航から四ヶ月後に母港に帰還した。

帰還できた戦艦は半数という大敗で、無敵艦隊はイングランド本土に一歩も上陸することができなかつた。強力な海軍によつて発展してきたスペインにとつて、この敗戦は重傷で、世界の盟主の交替の契機となつた一戦となつた。イギリス海峡からドーバー海峡にかけての海路は客船の通路でもあるが、スペインからイギリスに世界の覇権が移行した契機となつた海戦の現場であることを想像しながら通過すれば、船旅の興趣を増加させるものである。

十一・三 トラファルガーの海戦（一八〇五）

三大提督と三大英雄の衝突

世界には三大〇〇と名付けられた事象が数多く存在する。連載している海戦にも三大海戦があり、レパントの海戦（一五七二）、トラファルガーの海戦（一八〇五）、日本海海戦（一九〇五）である。同様に三大提督も存在し、アメリカ独立戦争で活躍したアメリカ海軍の英雄ジョン・ポール・ジョーンズ（一七四七―九二）、イギリス海軍提督ホレイショ・ネルソン（一七五八―一八〇五）、日本海軍の連合艦隊司令長官東郷平八郎（一八四八―一九三四）である。

その三大提督の一人ネルソンが指揮した海戦が三大海戦の一戦トラファルガーの海戦であるが、それを紹介するためにはユリウス・カエサル、チンギス・ハンとともに三大英雄とされるナポレオン・ボナパルトの躍進を説明する必要がある。三大悪妻の一人ジョセフ・イヌ・ド・ボアルネと結婚したナポレオンは一七九六年に総裁政府によりイタリア方面軍司令官に抜擢され、連戦連勝して第一次対仏大同盟を崩壊させるという功績をあげる。

しかし、フランスに対抗する国々の中心イギリスは強力な海軍により、同盟が崩壊しても洋上を支配する強敵であった。そこでイギリスの国力の源泉であるインドとの交易を遮断することを意図し、ナポレオンはイギリスの交易の中継基地となっているエジプトの奪取を目指すエジプト遠征を進言し、自身が遠征の総司令官となる。一七九八年五月、イギリス艦隊が強風で混乱している隙間に、二二三隻の輸送艦隊に乗船した約三万名の陸軍はツローンを出航する。

ナポレオンの軍隊は六月にマルタの要塞を攻略し、七月にはナイル河口のアレキサンドリアに上陸する。そこから南下して有名なピラミッドの戦鬪に勝利し、カイロに入城するが、その直後にネルソンが指揮するイギリス艦隊がアレキサンドリア東側のアブキール湾内に停泊していたフランス艦隊を攻撃し、ほぼ全滅させる。これによってイギリスに海上を支配されたナポレオンの軍隊はエジプトに孤立し、ネルソンはフランスに恐怖をもたらすことになった。

イギリス上陸作戦を決断

その年末にはイギリスの主導により第二次対仏大同盟が結成され、イタリアも奪回される事態となり、本国の総裁政府への糾弾が激化しているとの情報入手したナポレオンは、エジプトから単身で帰国し、クーデターによって第一執政となる。そこから再度、ナポレオンの進撃が開始され、オーストリアの軍隊を撃破し、和約を成立させて領土を割譲させることに成功する。その結果、対仏同盟は崩壊し、敵対するのはイギリスのみという状況にまでなる。

それ以後、国内では体制に反抗する勢力を徹底弾圧したために、度重なる暗殺未遂事件が発生するが、それを突破して一八〇二年には憲法を改正して終身執政に就任、一八〇四年には自身で戴冠して皇帝に即位し、フランス第一帝政を開始する。その途中の、一八〇二年に一旦はイギリスとアミアンの和約を成立させるが、翌年、イギリスが破棄し、フランスとイギリスとの関係は一層悪化し、ついにナポレオンはイギリス上陸作戦の準備を開始する。

義務を遂行したネルソン提督

ナポレオンはスペインに圧力をかけて同盟を締約し、フランス南部のツローンからスペイン南部のカルタヘナ、ジブラルタル海峡付近のカディス、大西洋岸のロシュフォール、ノルマンディ半島のブレストという広範な地域に艦隊を配置できる港湾を確保する。そこ

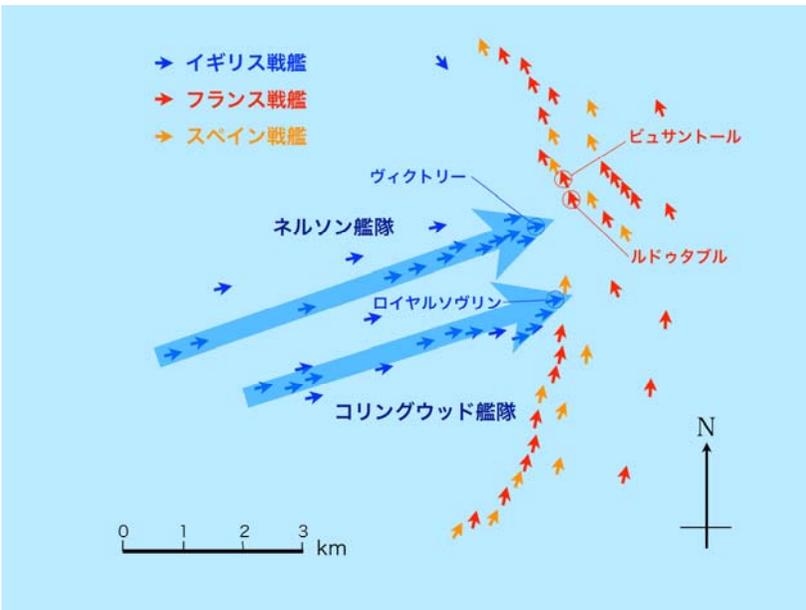
でイギリスはネルソンにツーロンとカルタヘナのナポレオン艦隊を封鎖させることにするが、ナポレオンはツーロンに停泊していたピエール・ヴィルヌーヴ提督指揮の艦隊をカリブ海域に出航させる。

その目的は海域の島々の港湾を占拠し、砂糖貿易を独占することであった。しかし、ネルソン艦隊がヴィルヌーヴ艦隊を追跡すると、ネルソンの名声に恐懼したヴィルヌーヴは命令を十分に遂行できないまま、カデイスに帰港してしまふ。そこに到達したのは、激怒したナポレオンからの司令長官解任の通告であった。名誉挽回を目指したヴィルヌーヴは沖合でフランス艦隊を封鎖しているネルソン指揮のイギリス艦隊に対決する決断をする。

一八〇五年一〇月一九日、カデイスを出航したフランス艦隊が四〇キロメートル南下して**トラファルガー**岬沖に到達したとき、退路を遮断されると危惧したヴィルヌーヴは反転して北上を開始するが、ネルソンはフランス艦隊が再度、カデイスに退却すると判断し、攻撃開始を命令する。二列になったイギリス艦隊が隊列の中央部分に側面から突撃してきた。これが有名なネルソンタッチといわれる独特の戦法で、隊列を分断させることを目指したものである。

反転を開始したフランス艦隊が巨大な三日月型の形状になったとき、その凹部に、カスバート・コリングウッド提督が指揮する戦艦ロイヤルソヴリンを先頭とする艦隊が最初の突進を開始した。それから二五分後、ネルソンが座乗する旗艦ヴィクトリーもヴィルヌーヴの乗船するフランス艦隊の旗艦ビュサントールに突進を開始する。ところがヴィクトリーとフランスの戦艦ルドゥタブルが接触して身動きがとれなくなったとき、悲劇が発生した。

戦艦ビュサントールから発射された一発の弾丸が甲板で指揮をしていたネルソンに命中したのである。フランス艦隊は死者四〇〇〇、負傷二四〇〇、捕虜七〇〇〇、捕獲された戦艦数一八隻、そしてヴィルヌーヴ提督が捕虜になるといふ悲惨な状態であったが、イギリス艦隊は死者約四〇〇、負傷二二〇〇、戦艦の損失はゼロという圧勝であった。しかし、その完全な勝利の直前、ネルソンは「自分は義務を遂行した」という有名な言葉とともに息絶えた。



ロンドンの都心にあるトラファルガー広場は、この戦勝を記念して一八二〇年に整備されたものであり、その中央の五六メートルの円柱の頂部にある約五・三メートルの銅像は説明するまでもなくネルソンの勇姿である。しかし、この勝利によってイギリスは海上覇権を手中にしたものの、ナポレオンの脅威が消滅したわけではなく、一八一五年のワーテルローの会戦でナポレオンが敗戦したとき、ようやくネルソンの偉業が評価されることになったのである。

十一・四 壇ノ浦の合戦（一一八五）

栄光の平氏一門

「一門にあらざれば皆人非人なるべし」、平家一族でなければ人間ではないという傲慢な言葉は、清盛の義弟である平大納言時忠の発言として『平家物語』に記録されている。保元元年（一一五六）の保元の合戦、平治元年（一一六〇）の平治の合戦が象徴する朝廷内部の権力闘争を契機として、上皇の身边警護の武士集団である北面武士の最大集団であった平家一門は急速に勢力を拡大する。その総帥が公然の秘密として白河法皇を實際の父親とする清盛であった。

保元の合戦で武功をあげ、武家として公卿となった最初の人物となり、父親忠盛の巨万の財力と広大な領地を継承して勢力を拡大し、仁安二年（一一六七）には五〇にして従一位・太政大臣という最高の地位にまで到達する。一族の多数は高位高官に就任し、その三女徳子（建礼門院）は高倉天皇の中宮として安徳天皇を出産し国母となる。財政においても、日本全国六六箇国のうち半分の三二箇国を知行とし、政治と経済の両面において盤石の体制を構築する。

より経済基盤を充実させるため、清盛は現神戸港の一部である大輪田泊を貿易拠点として改修し、日宋貿易を発展させることにより栄華の生活を維持する巨富を蓄財していく。そして大輪田泊の後背の土地である**福原**に一大拠点を建造し、ここを平家の本拠とする。このような強引かつ短期の異常な権力の拡張は、当然、既存勢力との軋轢の原因となり、嘉応二年（一一七〇）、清盛の長男重盛の息子資盛と関白基房とが衝突した殿下乗合事件が発生する。

平氏衰退の兆候

これは「平家の悪行のはじめなれ」と『平家物語』に記述されるように、増長する平家一族打倒の象徴とされ、以後、謀議が頻発する契機となる。そのような傾向に対抗するべく、治承三年（一一七九）には、清盛が福原から上洛し、謀議の背後に存在した後白河法皇を幽閉するクーデターを実行し、翌年、安徳天皇を擁立し、自身が院政を執行する。これにより皇位継承の希望がなくなった後白河法皇の二男以仁王は平家追討の令旨を発令し、東国の源氏などに挙兵を勧誘する。

これを察知した清盛は以仁王と加担した源頼政の逮捕命令を発令し、両名は奈良へ逃避する途中で敗死することになる。このような反抗の発生に京都は危険と判断した清盛は、直後に安徳天皇、後白河法皇、高倉上皇を連行して福原へ遷都を決行するとともに、源氏の追討命令を発令し、ここに平氏と源氏の一大決戦が開始されることになった。治承四年（一一八〇）にまず木曾義仲が挙兵し、二〇日後に源氏の大將頼朝が決起し、各地に戦線が拡大していく。

この年末、清盛が南都を焼打する暴挙を挙行し、平家への信頼が消滅していく渦中の治承五年（一一八一）二月に「頼朝の首級をわが墓前に」という執念の遺言とともに、清盛が熱病で死亡する。このため、かつて落日を扇子で逆行させようとしたほどの平家も、寿永二年（一一八三）、源氏との決戦を得意の海上で展開すべく、安徳天皇と三種の神器とともに瀬戸内海に逃避するが、定着場所が発見できず、ようやく讃岐の**屋島**を本拠とするこ

屋島の合戦

この本拠を討伐する大将に任命されたのが義経である。元暦二年（一一八五）二月、わずか五艘の小舟と一五〇騎の兵力で強風の深夜に摂津**渡辺**から出航した義経の軍勢は、通

常三日を必要とする紀淡海峡を一日で渡航して阿波の勝浦に上陸、屋島の平氏の軍勢は手薄との情報により進撃を開始し、地元の豪族桜庭良遠を打破して、翌日、屋島の対岸に到着する。そして民家に放火して大軍とみせ、陸側から騎馬で浅瀬を渡河して一気に屋島を急襲する。

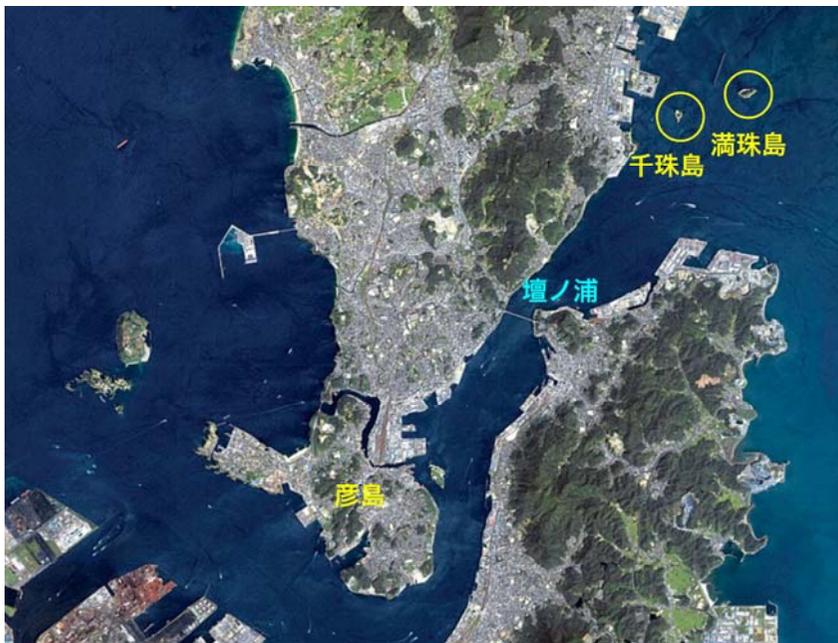
海上からの攻撃のみを想定していた平氏は狼狽し、屋島を放棄して小船で海上に逃避、海上から弓矢で陸上の源氏に戦闘を仕掛ける。その夕刻の休戦のとき、平家から挑発され、那須与一が扇面を鏑矢で射落とした有名な逸話が発生する。その美技に感嘆して祝儀の仕舞を披露した平氏の武士を義経の命令で与一が射落とし、折角の余興が再度の戦闘の開始となるが、平氏一族は上陸ができず、安徳天皇とともに関門海峡にある彦島まで逃避することになる。

壇ノ浦の合戦

彦島に孤立した平氏を討伐すべく、義経は摂津、伊予、紀伊の水軍を味方として八四〇艘の水軍を編成し、平氏は知盛を大将とする五〇〇艘の水軍が対峙し、元暦二年（一一八五）三月二四日昼に歴史を決定する戦闘が開始された。しかし、当時の軍船は西洋で使用されていた多数の漕手が動力となる大型軍船とは相違して、せいぜい二〇人乗りの小船であり、彦島のある関門海峡の急速な潮流では自由に操船することは容易ではなかった。

戦闘の初期には潮流を熟知した平氏の軍団が海戦に不慣れた坂東武者の源氏の軍団を弓矢で攻撃して優勢であり、義経の水軍は一〇キロメートル北東の満珠島・千珠島まで後退させられるが、午後になって潮流が変化したことで、異説はあるが、義経が当時の戦闘の作法に違反して、操船をしている非戦闘員の水手や楫取を射撃して戦況が変化した。さらに阿波の水軍が寝返って平氏の戦略を義経に通告したことが逆転を決定したという情報もある。

陸上には源氏の軍勢が待機して上陸できず、もはやこれまでと覚悟した清盛の正室時子は安徳天皇を抱擁し天叢雲剣とともに入水し、救出され京都に護送されて出家することに



なる建礼門院も入水し、一族の武将たちも次々と入水する。経盛のように一旦上陸して出家してから入水した武将や、武勇で有名な教盛は大将知盛の勝敗は決定したので罪作りな戦闘はするなという言葉を復命して入水するなど、『平家物語』には数多くの滅亡の美学が伝承されている。

筆者も大型客船で通過したことがあるが、関門海峡は最小の幅員が約六〇〇メートルで陸地が眼前に切迫してくるうえ、潮流方向が一日四回も変化し、現在でも航海の難所であることが理解できる光景である。しかし、現在から約九〇〇年前、ここで日本の二大勢力が最後の対決をして数多くの人々が水没し、それ以後、七〇〇年以上継続する武人政権の発端になった場所であることを想像すると、その光景に一層の感慨が追加されるのである。